

黒板とチョークがいない

岡崎昭夫
芸術学系助教授

行く先

筑波大学に転任してきて、宇都宮から筑波に通い8年がたった。その間、年のせい、人文系の仕事のせい、座骨神経痛になり、歩行や乗換駅の階段の上り下りに支障をきたしたことがきっかけで、40歳代の半ば過ぎにして運転免許を取ることにした。

通った教習所は、館ひろし主演の昔の映画『免許がない』のロケ先にもなっていて、玄関の正面の壁に車のボンネットが飾られ、よく見ると出演者や映画スタッフのサインが寄せ書きされていた。

ここで、学生時代以来、教えてきた者が教えられる立場になったことは、意外に新鮮な体験であった。

運転とは認知・判断・操作の一連の過程だそうだが、最初は外界を認知はできても、即座に次の判断ができないから的確な操作は見当もつかない。スピードと自分が合わずに心技体が凍ってしまっていた。

実際、路上実習の初日、あるカーブでせまってくる大きなトラックに目を奪われて、呆然自失になったことがある。教官に右手でハンドルを回してもらい、危うく難を逃れたが、助手席の教官は落ち着いたものだ。

教官いわく「自分の行く先を見ていればぶつかることはない」と。なるほど、自分の行くべき先は道路左端の路側帯の向こうにあつて、目前のトラックではなかったのだ。

研究室の電話とファックス

こうして宇都宮と筑波の間の80キロを毎週、往路は南東の筑波山を、復路は北西の日光連山を目指して、3万キロ以上を駆動した4年間が過ぎた。

研究室と宿舎を行き来し、週末は自宅という生活で、当初はさまざまな連絡は主として研究室の電話とファックスであったが、それもこの数年ですいぶん様変わりした。

最近は電話もファックスもほとんど使わなくなってしまったのだ。時折、会議がある水曜の昼や夕刻に研究室の電話が鳴っても受話器を取る気になれない。その日に限って、税金対策のワンルームマンション購入の勧誘ばかりだからだ。

どうしてこの番号を知ったのかと尋ねると、職員録と言う。そんなによい話なら貴方が買えばと勧めると、いや公務員の方には銀行のローンが出やすいと答える。この先、非公務員になるとこんな電話が来なくなるのだろうか。

ともあれ、今はこの研究室の固定電話の使用頻度は極端に減り、その代わりに携帯とノートパソコンによる電子メールでほぼ事足りるようになった。添付ファイルやPDF文書の送受信の普及で、古い電話機のファックスのロール紙を替えたのがいつかも忘れてしまった。

大学に職を得た1980年のころ、研究対象としたアメリカの美術教育改革運動の報告書は、そうした運動を全米規模で展開するために、各大学の研究者の間でファックス会議をした成果として1970年代中期に刊行されていた。

当時のファックスは現在の電子メールだったのだ。正確には、ファックスと言わずにファクシミリ (facsimile) だったが、当時の辞書を引いても「模写電送」とか「写

真電送」とかの訳語で、その機械の姿すら想像できなかった。

ワープロの未来予想

思い返せばこの時期から現在までの情報機器の変化は驚異のように見える。例えば、ワープロを初めて使ったのは1984年、わずか8文字の液晶表示のタイプライター型だった。内部記憶は2000字程度が限界で、印刷の印字は16ドットの品質、1文字ごとに漢字を変換して、外部記憶はなんとカセットテープだった。

これは、各国の欧文にも対応していたF社の「オアシスライト」という機種で、22万円もした。翌年の1985年に各社は10万円を切る機種を投入して、一気にワープロ時代の幕が開かれた。

たまたま保存していた当時の『ワープロ最新情報'86』(朝日新聞社刊、1986年7月)によると、ワープロの販売台数は1984年度が20万台強で、1985年度には100万台近くに急増している。これは、東芝が日本で初めてワープロを630万円で発売した1979年4月からすると、わずか5年後ということになる。

興味深いのはこの時期のワープロの未来予想だ。ある雑誌(講談社スコラ刊、1986年1月)には「ワープロが情報のワークステーションに生まれ変わる日の話」が載せられ

ている。

その未来の姿とは、漢字で40字25行が表示できるディスプレイで、持ち運ぶときにキーボード側に折りたたむフタとなり、軽くて（せいぜい3キロ）、メモリがたくさんあり、使いやすいソフト（ワープロ・通信・表計算・データベース）、モデム、フロッピーディスクを内蔵していることだった。

この1986年における未来のワープロの予想は、今2004年1月にこの原稿を打っているF社のノートパソコンの形態や機能とさほど変わらない。未来予想は基本部分では実現されたと言える。

自分だけの情報バンク

いつの間にか文書作成のみに特化したワープロが消え去り、その機能がノートパソコンに含まれた時代になった。

大学で教育・研究に携わる私たちにとっても、この自分のためにだけに構築した情報のワークステーションとして、ノートパソコンは手放せない。同じパソコンでも蓄積されている中身の情報はひとそれぞれで違うからだ。

電話や郵便の代わりにメール・文書・画像・動画を送り、ネットで製品のカタログを取るといったことから、ネットで和洋の新書や古書を見つけ、文献の所蔵先を調べ、研究対象の人名や事項を検索し、過去の研

究を参照するまで、このノート1台で可能になる。

日常の業務から図書館業務まで、使うほどに自分だけの情報バンクと化してゆくノートパソコンは、事務処理や研究の遂行だけではなく、自分の講義の準備やその改善にも大いに役立つ道具になっている。

例えば、美術教育に関係する私の場合、文字情報のみを学生に提示しても効果が無い。いろいろな画像と動画の事例が先にないと講義が進まない。

昔はプリント・OHP・スライド・ビデオと幾つもの教材や機器を携帯したもののだが、今は、文字・画像・動画の資料を、「PowerPoint」のソフトで自由自在にアニメーション付きで、スクリーンやテレビに提示できてけっこう楽だ。

これは、外部のモニターの出力端子と60ギガのハードディスクを持つノートパソコンがあるからだ。

「PowerPoint」の講義録

今、熱中しているのは、NHKのテレビ番組「課外授業ようこそ先輩」を自分の講義で活用することだ。

これは、視聴された方はご存じと思うが、「各界の第一線で活躍する人々が出身校である小学校を訪ね、その専門とする世界と自らの人生について授業」（NHK ホーム

ページ) するものである。

1998年4月から現在まで約200本が放映されているが、建築・絵画・彫刻・染色・木工・現代美術・書道・デザイン・絵本・舞台美術・生け花・服飾・アニメ・マンガ・CM・CG・写真・映画などの芸術関係の番組は約60本もある。

この課外授業は、二日以上に及ぶ「総合学習」で、美術・文芸・芸能・音楽・スポーツ・医療など、実験・実習を伴う専門分野が適しているからだろう。

芸術関係の授業番組は既に圧縮した動画ファイルとして手元のハードディスクに入れているので、自分の講義で活用するときに「PowerPoint」のスライドを作成すればよい。

スライドに、出演者のセリフ・生徒の応答・ナレーションの解説などを次々と書き出し、分割した動画ファイルと切り取った場面の画像を貼付し、最後に、内容にそった学生への質問項目を打ち込めば、ほぼ1コマの講義録ができあがる。

筑波の芸術出身者も、明和電気（「常識やぶりのアート術」2001年12月放送）と岩井俊雄（「パラパラ漫画がアートになった」1998年10月放送）のお二人がいて、芸術の学生はこの二つの番組を見つめる。そこに芸術家と教育者が合体した自分の未来の姿を見出すからだろう。

「課外授業」の教材化が一段落したら、次は「仮装大賞」（日本テレビ）の番組を講義で活用してみようと思っている。これはメディアによる芸術支援の事例として過去20年以上の歴史を持つ番組で、この正月の71回大会では、多摩美術大の3名のチーム（「じゅうどうぶつ」）が優勝し、筑波大の11名のチーム（「棒高跳び」）が準優勝した。

キャンバスとキャンバス

ソフトの解説書は「PowerPoint」の「スライドをキャンバスに見立てる」ように助言している。スライドを文書・画像・動画などの要素を貼り合わせた画布と見なしてイメージを膨らますと、訴求効果のあるプレゼン資料が作成できるという。

私の講義録は既成の情報の加工に過ぎないが、講義が仕上げたスライド作品を見せる展覧会で、それを視聴する学生が観衆だと思えば、毎週の準備や講義もけっこう楽しくなるから不思議なものだ。

こうして十年一日の講義ノートは昔の話になり、毎年バージョンアップする講義録を入れたノートパソコンで、黒板とチョークがいらなくなった。パソコンとネットの普及により、大学の「行く先」には固定した研究室や教室のないキャンバスが予感される。

（おかざき あきお／美術教育）